AMCoR
Asahikawa Medical College Repository http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/

旭川医科大学研究フォーラム（2004.12）５巻１号:2-14.

医学部における人文系教養教育のあり方をめぐって 回顧・展望・提言

近藤 均

旭川医科大学研究フォーラム 5(1) ：2～14，2004

依頼論文（総説）

医学部における人文系教養教育のあり方をめぐって
－回顧・展望・提言－

近　藤　　均*

【要　　旨】

医学部における人文系教養教育のあり方について、当事者の一人の立場から回顧・展望・提言をまとめた。人文系を哲学・史学・文学とその周辺と規定したうえで、まず、戦後における大学一般における人文系教養教育のあゆみを簡単に振り返り、次に医学部に限定して同様に振り返り、さらに、旭川医科大学の場合を管見し、そこから当該問題の将来を展望した。最後に、筆者が考える医学生向けの理想的な人文系教養教科書の構想を提示しつつ、具体的な提言を加えた。

キーワード　教養、人文系、哲学、史学、文学

はじめに

本稿は、大学における人文系教養教育、とくに、医学部における人文系教養教育のあり方をめぐる論考である。昨今の、医学部をめぐる教育環境の大きな変化の中で、今後の人文系教養教育は何をめざすべきか、どうあるべきかを、抽象的・観念的にではなく具体的・実践的に提言したい。

そもそも「教養教育」の定義だけでも、突き詰めていくといろいろ議論はあろうが、「専門教育」の対概念というほどの理解で済ませ、細かくは問わない。また、「教養教育」と「一般教育」との違いも曖昧であるが、本稿ではほぼ同義と理解することにしよう。むしろ問題は、「人文系」の範囲をどう設定するかである。この点についても種々の考え方があるが、ここでは、英語 humanity の淵源にあたるラテン語 humanitas（人間性、教養）が古代ローマ以来ふつうに前提としていた哲学・史学・文学とその周辺領域に限定し、教育学・心理学・社会学など、近代以降に哲学から分化し独立していった学問領域は人文系に含めないことにする。また、英語・ドイツ語などのいわゆる語学も含めない。

本稿末尾に示した文献リストは、筆者の手許にあって本稿執筆の参考にした単行本を、ほぼ刊行年次順に整理したものである。人文系教養教育を主題とする文献だけでなく、間接的・副次的に触れているだけのものも含んでいる。筆者がたまたま目にして読了した文献のみを収め、網羅的リストであることを意図してはいない。2003（平成15）年以降発行の文献が極めて少ないが、これは筆者の文献渉猟能力の低下に起因するのかもしれないが、反面、このジャンルの文献は2002年まででほぼ出尽くしてしまったのかとも思われる。以上のような不備もあり、このリストから即断するのは危険であるが、ここ20年ほどの人文系教養教育の大まかな流れや問題点は捉えることができるように思われる。以下、このリスト中の文献への言及は著者姓と番号の略記で済ませ、その他の文献についてはそのつど明示しながら拙論を展開していきたい。

なお、このリストには、日本人によって日本語で書かれ、日本の教育を問題にしている文献のみを収録した。また、ここ数年、小中高の学習指導要領改定に伴う「ゆとり教育」、それに起因する「学力低下」との関連で、大学生の学力、とくに国語力・読解力・作文力の低下を論じた文献が増えてきている。これらも広

*旭川医科大学　歴史・哲学

い意味では人文系教養教育を論じたものといえようが、問題が拡散しすぎるのでリストからは原則として除外した。さらに、多くの大学で実施されるようになってきた学生による授業評価・教員評価、多様な入学試験、少子化による大学間生き残り競争の激化などと結びつけて人文系教養教育の意義に言及したものも少なくないが、これらも原則として収録していない。

このリストをもとに、まずは必要最小限の歴史をたどろう。

1．大学における人文系教養教育の前史（戦前・戦中）

大学生といえば、戦前はエリート中のエリートであった。学生は、旧制の高等学校（あるいは大学予科）で文系・理系の基礎学力と教養を幅広く身につけた後、大学でそれを深めつつ、さらに専門分野を学んでその「蘊奥ヲ攻究スル」（大学令）のを建前とした。教養の何たるかはおおよそ自明であり、学生もそれを自覚していた。その分析は竹内(114) や竹田(109) に詳しい。明治末期から大正期にかけて、人文系の教養とは、和漢洋の古典的名著をバランスよく学んで自我確立や人格陶冶の糧としようとする努力と、その結果として体得した知恵・知識を意味した。これは、初等教育のみで社会に巣立った当時の非エリート階層の規範文化としての、肉体的・精神的な鍛錬を旨とする「修養」（新渡戸稲造(106) はその典型）とは、明確に一線を画すものであった。

やがて、いわゆる大正デモクラシーに連なる自由主義思想の隆盛を背景に、教養は半ば自己目的化し、いわゆる「大正教養主義」が確立された。さらに、ロシア革命に刺激されてマルクス主義が流行し、学生の主要な興味・関心は社会変革へと傾斜したが、昭和初年以降、それは危険思想として厳しく弾圧された。1940年前後に人文系教養論のバイブル的存在だったのが河合の(001) や(039) である。そこでは社会変革は影を潜めて再び自我確立や人格陶冶が強調されているが、戦時体制に窒息させられつつあった教養主義文化の最後の抵抗の所産であった。

2．大学における人文系教養教育の歴史（戦後）

教養が大学教育の中で専門と並ぶ大きな柱として位置づけられたのは戦後のことであった。教養の涵養が中心であった旧制高校と専門教育に特化した旧制大学とをつないで新制大学が誕生した。一般教育課程を設け、アメリカをモデルにリベラルアーツ教育を積極的に導入し、学生は人文・社会・自然の３分野にわたって幅広く単位を取得することが課せられた。しかし、課程の性格づけが曖昧だったため、とりわけ人文系では、教員の専門分野を薄めて一方的に聞かされるだけであったり、逆に高校の授業の延長にすぎなかったりと、発足当初から学生には不評であった。田中(004) に典型例をみるように、1960年前後には人文系教養教育の積極的意義づけの努力もなされたが、すぐには改善の機運はおとずれなかった。

ただ、その一方で、竹内(114) に見事な指摘があるように、1960年代までは、講義そのものはつまらなくても、学生の間には、キャンパスにおける規範文化として教養主義が確かに存続していた。学生が教養として読んでおくべき人文系の本、読まないと仲間から疎外されてしまう本があった。それらは端的にいうと、たとえばマルクス主義や実存主義の基本文献、それらに立脚する一部のカリスマ的思想家・文化人の著書であった。教養文化と呼べるものは、講義よりもむしろ、これらの本を介してキャンパスに息づいていた。

しかし、1960年には10パーセントに過ぎなかった大学進学率は、その後、急激な勢いで上昇し、1975年には38パーセントに達した。天野(015)(029) がアメリカの教育社会学者に倣っていうように、学生は「エリート」ではなく「マス」になった。学生の教養主義・教養文化は自然消滅した。しかし、単に自壊しただけではない。形骸化した大学教育そのものを意図的に突き崩そうとしたのが、第一次ベビーブーマーたちによる、1968年前後の全共闘運動であった。

この運動が槍玉に挙げたのは必ずしも教養教育だけではなかったが、運動は多くの大学で教養部から起こった。内容空疎な教養教育の、講義や教員に対する不満と失望は、教養知識人に対する糾弾へと進み、教養主義の幻想を突き崩しつつあった（その思想的遺産のひとつが宇井ほか(010) である）。全共闘運動が投げかけた諸問題は70年代初頭の中央教育審議会によっても重く受け止められた。しかし、その後の答申にはほとんど反映されず惰性が進行した。

大きな方向転換は答申から20年も経った1991年にな

された。この年、一般教育科目（教養科目）と専門科目のカリキュラム上の規定が大学設置基準の大綱化により排除され、各大学が自由にカリキュラムを編成できるようになった。この措置によりリベラルアーツ教育の脱形骸化や飛躍的充実も可能となった。しかし、この自由化は結果的に、ほとんどの大学で専門に特化した教育を重視する方向に進み、教養教育の時間は削減され、残った教養教育も、おおむね専門教育に擦り寄らせる方向での模索・再編成がなされた。

とはいえ、大学によっては独自の工夫もなされ、人文・社会・自然の枠にとらわれない「環境学」「女性学」「平和学」「生命倫理」などが新規開講された。その後、折からの少子化とも絡み、各大学は生き残りをかけて個性・特色を発揮しようと努力してきた。一部の大学ではボランティア活動や就職体験もカリキュラムに加えられた。さらに、小中高でのいわゆる「ゆとり教育」の実施に伴い、補習教育も大学の教養教育担当者の重要な役割となってきた。

こうした大学自由競争化の背景の中で、教養教育の内容や教育スタッフの質を問い直す動きも活発になり、90年代前半から、教養論や教養教育論が出版界で活況を呈してきた。

3．人文系教養の問い直し百花繚乱の時代へ

（1）教員の質をめぐる問い直し

1990年代前半の、教養教育を問い直す動きは、もちろんその中身にも向けられたが、同時に、それを担当する大学教員のあり方や資質にも向けられた。その動きは、すでに80年代に潮木(014) や西部(016) などに見られたが、90年代に入って起爆剤となったのは、筆者のみるところ鷲田の(018)(019) である。これらは、教員の質の現状に問題があるから若い優秀な人材に参入してきてほしいとの願いを込めて書かれた本であるが、著者が哲学者で人文系教養教育を売りにする大学の教員なので、おのずと人文系教養教育論にもなっていた。

鷲田に刺激されてか、その後、教養・専門を問わず、教員の質を問題にし大学の現状を慨嘆したエッセイが、桜井(020)(022)(112)、川成(030)(033)(068)、中岡(050) など、大学教員によって毎年のように出版されてきた。しかし、これらは多かれ少なかれ、いわば同僚を槍玉に挙げて罵倒しながら、著者自らは蚊帳の外に身を置くというスタンスで書かれていて、必ずしも建設的な論考ではなかった。出色なのは人気作家による大学教員揶揄である。筒井(017) は、空疎な饒舌を繰り返し嫉妬や自己陶酔に明け暮れる文学部教員たちの生態を揶揄し、ベストセラーになった。マスコミ人による大学人批判の中では、新聞連載を単行本化した産経(021) が最も注目を集めたようである。

（2）歴史学的・文化論的視座からの問い直し

やや遅れて、歴史学的・文化論的視座からの教養論・教養教育論が盛んになり始め、教養の歴史的変遷をたどって反省と展望を付加したものがいろいろ現れてきた。世界史的なスケールで論じた西洋中世史学者の阿部(037)(053)(089) や、比較文学・比較文化学者の藤井(041)、近現代日本史研究に立脚した筒井(075)、竹内(114)、秦(115) などである。いずれにも著者の該博な知識が盛り込まれ、教養や教養教育のあり方に関する一般論をうかがい知ることはできるが、将来ビジョンとなると抽象的・観念的になりがちで必ずしも明確ではない。

（3）内容や技法をめぐる建設的提言や実践報告

同じ90年代後半には、教養の具体的・実践的な内容をめぐって建設的な提言を試みる論著も、大学内から多数現れ始めた。その中には、安川(044) のように左翼イデオロギーに立脚するものもあり、漢文教育の復権に活路を求める加地(093) のような立場もあった。しかし、いずれも、もはや今日では学生からも教員からも強い支持は期待できないであろう。そんな中に、赤塚(043)、山口(066)、立花隆『脳を鍛える』（新潮社、2000年）のように、該博な知識を背景に学生の知的好奇心を刺激するような著書もあった。しかし、著者の知識自慢・自己満足が鼻を突くとする批判も少なくなかったようである。

同じ90年代後半には、大学の教養教育現場で実践した授業改革を跡づけた報告書も出てきた。京大スタッフによる(040)、東大スタッフによる(063)、立教大の(082)、ＩＣＵ（国際基督教大学）の(110) などである。しかし、これらはいずれも人的・物的に恵まれた老舗（しにせ）の総合大学や古くから教養教育に定評のある大学での実践報告であり、他大学では参考にしにくいものであった。

同じ頃、講義中の私語が多くの大学で問題になり始めたことが大きなきっかけとなって、教養・専門を問わず、授業内容だけでなく教育の技法に関しても具体的に指南する大学教員用参考書が目立ち始めた。新堀(023)、森田ほか(031)、伊藤ほか(055)、寺崎(057)(111)、安岡ほか(058)、宇佐美(062)、岩田(074)、浅野(101)、島田(104) などである。また、カリキュラム自由化による専門教育の相対的重視と教養教育の相対的軽視は教養教育を非常勤講師に依存する傾向を強めたが、こうした状況に当事者自身が非を鳴らした論考として(042)(064) などが注目される。

（4）アカデミズム外部からの問い直し

さらに、2000年前後からは、アカデミズムの内側だけでなく外側からも積極的に教養教育の問い直しがなされるようになった。とくに熱心なのは予備校関係者であった。駿台予備学校の竹内(092)、大島ほか(091)、河合塾の丹羽(078)(119) などである。率直にいって彼らは、われわれ大学教員よりもよほどしっかりと現代の大学生の心を捉えている。これらの大手予備校は、単に受験技術を指南するだけでなく、生徒の知的興味を刺激し知的バックグラウンドを広げることにも意を注ぎ、本質を求める知的探究心を養おうとしている。良かれ悪しかれ大学が専門に特化してきたことを背景に、予備校が大学の教養教育さえをも肩代わりしていく傾向がはっきりと見てとれる。

大学における人文系教養教育の意味を広い視野から根底的に問い直し、あるべき教育の中身を具体的に提示したのが、在野の評論家浅羽である。彼は著書(072)で、大学でなされている教養教育のほとんどを「娯楽」「自己満足」「虚栄」と切って捨て、真の教養とは、「どこまでも、自分の生き方へフィードバックしてゆける知、生きる指針を、自分とは何かを、世の中全体との関係で位置づけられる知」でなければならないと規定し、さらに(077) では、彼の理想とする講義内容を非常勤講師としての実践に基づいて提示している。彼の辛口評言により多くの大学人が面目を失ったといえよう。同じく在野の評論家による辛口の大学教育批判として、日垣(028) も注目される。

（5）教養の場としての大学枠の消滅

さらに、同じく90年代後半からの出版界の画期的な動向として注目されるのは、学生だけでなく広く一般社会人にも、教養のあり方、身につけ方、勉強法を具体的に指南するような本（多くは新書版）が量産されてきたことである。このようなハウツー本として古くは梅棹忠夫『知的生産の技術』（岩波新書、1970年）や渡部昇一『知的生活の方法』（講談社現代新書、1976年）などがあったが、これらはまだ、アカデミズム内部の知的エリートが後続のエリート予備軍のために専門情報の整理のコツを伝授するという趣向で書かれていた。学生の教養から広く一般社会人の教養にまで裾野を広げたハウツー本の流行は近年の傾向である。林(035)、苅谷(034)、和田(070)(083)、中山(084)、さらに鷲田(025)(038)(079) などがこの系譜に属する。川喜田二郎『発想法』（中公新書、1967年）や野口悠紀雄『「超」整理法』（同、1993年）などは両者の中間に位置づけられよう。

映像社会・情報社会の活況を背景に、これらの本は、人文系の教養は情報処理のちょっとした工夫で誰にでも手軽にアクセスできるものであることを如実に示した。そして、戦前のような、「修養は世間で、教養は大学で」という単純な図式がとっくの昔に滅び去ったことを再確認させただけでなく、意義が自明とされてきた大学教育そのものに対する不信感をも強く喚起した。極めつけは、「学校化社会」そのものに対するアンチテーゼとしての上野(103) や「独学」をキーワードに据えた東郷(98) であろう。

ここまで行き着けば、もはや、教養のあり方を大学内に限定して論じることが全く無意味であることは明白である。そんな事情もあって、2003年から当該書籍の出版がめっきり減ったのかもしれない。それにしても、こうして、教養の、いわば「脱大学化」が進行している折に、少子化の影響で、希望すれば誰でも容易に大学に入れるという「大学全入時代」が到来したのは、何とも皮肉なめぐり合わせではある。

（6）学力低下問題への対処と人文系教養教育

教養論・教養教育論の隆盛にさらに拍車をかけたのが、小中高の「ゆとり教育」の推進により大学生の「教養」はおろか「基礎学力」そのものが崩壊し始めたという危機感である。危機感はまず、学力低下がはっきり数値に表れやすい理系の分野から起こった。算数・数学では『分数のできない大学生』（東洋経済新報社、

1999年）をはじめとする三部作、理科では左巻健男『「理数力」崩壊　学力はどこまで落ちるのか』（日本実業出版社、2001年）が典型である。さらに、文系をも含め大学生の全般的な基礎学力低下を慨嘆したものとして、市川ほか(054)、和田(059)、大野ほか(080)、戸瀬ほか(085) などが現れた。学力低下はいわゆるエリート校も例外ではないことを強調したものとしては立花(095)などがある。

そんな背景の中で、人文系の基礎学力および教養の底上げに積極的に貢献した本として特筆すべきは、斎藤孝の一連の編著書である。とくに『声に出して読みたい日本語』（草思社、2001年）は、和漢の古典『枕草子』『平家物語』『論語』などの冒頭、正岡子規・石川啄木・島崎藤村などの代表的俳句・短歌・詩、夏目漱石『草枕』や川端康成『雪国』など近代小説の冒頭など、誰もが小中学校あるいは高校で一度は目にした作品を抜粋し総ルビ付きで収め、国民各層の人文的教養の理想的教科書となった。これは、名文を声に出して読むことによって脳細胞を活性化し、いわば身体の全体を通してリズムを味わい、全身で教養を身につけることをねらった本で、ベストセラーになった。『理想の国語教科書』（文芸春秋、2001年）とともに国民各層に多大な影響を及ぼした。さらに、読書の意義を強調した(105) は現在、大学の教養教育の多くの現場で参考にされている。

以上、大学の人文系教養教育のあゆみを浅く広くみてきた。しかし、リストにあげた文献の多くは、いわば、よき社会人の養成を目的とする大学・学部の学生をイメージして書かれている。医学部は専門職業人養成の学部であるから、おのずと異なる事情もある。今度はそれに目を向けよう。

4．医学部における人文系教養教育の歴史

総合大学の１学部としての医学部であれ医学部単科大学であれ、1980年代半ばまでの人文系教養教育は他学部とほとんど同一歩調をとっていた。ところが90年代になると、カリキュラムの自由化に加え、進境著しい医歯薬系学部の特殊事情として、専門の教育内容の著しい肥大化が起こり（保阪(090) が紹介する説によると、現代の医学生が学ぶべき知識量は終戦直後の700倍以上)、その対策として、一方では、専門教育内容の精選のために全国共通コアカリキュラムが導入された（2001年)。そして他方では、そのしわ寄せがおのずと教養教育に及び、とくに人文系教養教育は削減の傾向が顕著に進んだ。

しかしながら文部科学省は、「幅広く深い教養及び総合的な判断力を培い、豊かな人間性を涵養すること」（大学設置基準）が大切だという理念自体には変更を加えないどころか、あらためてその重視を打ち出してさえきた（1998年大学審議会答申)。こういう板ばさみの状況の中で、2000年からは大学評価・学位授与機構によって教養教育外部評価も実施されるようになり、各医学部は、限られた時間の中で、ますます「量より質」の人文系教養教育を推進する必要に迫られてきた。

しかしながら、ひとくちに医学部といっても、総合大学と単科大学、国・公・私立という設置形態の別、さらには個々の大学の特殊事情もあり、千差万別である。そこで旭川医大に限定して人文系教養教育をさらに具体的に考えよう。

5．旭川医大における人文系教養教育の歴史

（1）リベラルアーツ型教育重視の時代

本学の開学は1973年であったが、当初から20年近くにわたって、教養教育（一般教育）は大学設置基準にがんじがらめに拘束され、学生には、人文・社会・自然36単位、それに語学（英・独）と体育が課せられていた。人文・社会系では「哲学」「歴史」「文学」「心理学」「社会学」「法学・政治学」「経済学」などディシプリン型の科目が置かれていたが、小規模単科大学ということもあって、科目メニューも多くなく、しかもその内容は、「６年一貫教育」「くさび型教育」が大学発足当初からの教育理念として強調されながら、医学・医療に直接結びつかないものが大半であった。

シラバス（履修要綱）によって初期の人文系一般教育の内容をみると、たとえば開学７年目の1979年度の専任助教授による「哲学」（通年４単位）は、西洋哲学の概説、とりわけ実存哲学を主体とするものであった。専任教授による「歴史」（同）は史学概説と北海道史が中心であった。非常勤講師による「文学」は『古事記』や『古今集』の解釈であった。いずれも担当者の専門分野の概説講義であり、広義のリベラルアーツ型教育であった。

逆に学生の立場からみると、中川(027) の表現を借りれば「医学の「い」の字も感じられない科目ばかり」といっても過言でなかった。しかし、当時は医学専門教育担当者もこの傾向を是認し、むしろポジティブに評価していたようである。同じ1979年に日本医学教育学会で行われた、本学内科学・病理学・細菌学の各教授連名の「医科大学における一般教育のあり方」と題する研究発表の要旨を引用してみよう（『医学教育』10（5））。

「医科大学の一般教育課程の学科には、専門課程との関連性が強い物理・化学・生物などの自然科学系の大部分と人文・社会系の一部と、他方、直接の関連性の薄いと考えられる語学系や人文系の大部分がある。前者は医学の基礎とも考えられ、これらの知識なしには応用科学としての医学の存立は困難といえるものであり、後者は、医学と直接関連をもつ必要も、もたせる必要もなく、むしろそれ以前の、知的人間の熟成のための栄養ともいうべきものである。

したがって、一般教育課程の学習では、医学との関係をそれに強調する必要性は乏しく、強調されなければならないのは、個々の学科にはそれぞれの学問の体系があり、いずれを選んでも忍耐強い積極的かつ継続的学習が必要なことである。“一貫教育”とは、安易に医学を志向するものではなく、このような学習習慣を早期に、一般教育の時期に確立することを目指すべきであって、内容の関連性にのみ拘泥すべきでないものと考えられる。このため一般教育では、学習に対して定量的評価のなされやすい科目はもちろん、定量的評価の比較的困難とされる領域においても、担当教員による学習適・不適の判定の努力がなされるべきである。学生の資質を判定する能力も、教員自身の学習によってより高められるものであろう。

一般教育と専門教育は、普遍と特殊という立場の違いはあるにしても、個人の維持的学習の一部であり、一般教育で最も望まれることは、医学色のある学習というよりも、専門家になるための“継続的学習の必要性”に対する動機づけである」。

冒頭部で「人文・社会系の一部」とあるのは、当時の本学のカリキュラムに即していうと「医学概論」と「医療社会学」のことである。それ以外の人文・社会系の学問にはそれぞれ独自の体系があって、学生には「忍耐強い積極的かつ継続的学習」が必要であり、その意義は、「専門家になるための“継続的学習の必要性”に対する動機づけ」にあるというわけである。つまり、誤解を恐れずにいえば、人文・社会系科目には、「教養」というよりは肉体的・精神的な「修養」に近い意義づけがなされていたわけである。

（2）「大綱化」以後の模索の時代

ところが、大学設置基準大綱化の前後から、事情は大きく変わった。まず1990年に一般教育カリキュラムの微修正が行われ、4単位の通年科目が減って2単位の半期科目が増え、学生の選択の余地も増えた。しかも、その後、人文・社会系では徐々に医学・医療問題を講義に取り入れる傾向が目立ってきた。たとえば「哲学」は西洋哲学概説から生命倫理へシフトしてきた。1998年には「歴史」も北海道史から医学医療史へと衣替えした。

画期的だったのは1999年である。カリキュラムの大改革が断行され、早期体験実習、問題解決型の医学チュートリアルなど、低学年から具体的・実践的な教育が重視されるようになった。講義科目では、教養・専門を問わずコアカリキュラムの精神を先取りして必修科目と選択科目のメリハリが利かせられた。教養の選択科目はディシプリン型が減って問題即応型が増え、人文・社会系では「哲学基礎」「生命倫理」「医療人間学」「医系文学論」「科学技術史」「医療人類学」「ジェンダー論」「比較文化論」など多数が開講されて学生の選択の幅は格段に広がった。医学科・看護学科の合同授業とされ100分授業から60分授業になったのも大きな変更点であった。

そして2002年には、全国共通コアカリキュラムの実施に合わせて、再度、カリキュラムの改定が図られた。人文・社会系選択科目では、「歴史学」を「医療文化史」に、「生命倫理」を「応用倫理」にそれぞれ衣替えし、リメディアル（補習）教育の意味も込めて新たに「教養概論」を置いた。「教育学」「言葉と文化」も新設した。しかしながら、度重なる改定を経ても学生の間には、相変わらず教養科目は単位さえ揃えればよいという意識が強く、試験の簡単な科目や評価の甘い

科目に人気が集まる傾向は否めない。興味・関心から遊離していて面白くない科目が少なくないなど、学生の批判も相変わらずである。しかも、コアカリキュラム実施に伴って、国家試験やＣＢＴ（共用試験）に出ないものは最初から切り捨ててかかる傾向がますます強まるのではないかとも懸念される。医学生に課される知識量は今後も増えこそすれ減ることはないであろうから、人文系教養教育は、ますます「量から質へ」がキーワードとなるであろう。

（３）コアカリキュラム確立以後の新たな模索の時代

学問として極めるならともかく、教養を高めるだけが目的なら、本来、人文系を「哲学」だの「歴史」だの「文学」だのと分けるのは方便にすぎない。ただでさえ、理系では細分化が進行している半面、人文系では統合化や組み換えが進んでいる時期である。時間も限られている医学生向けの人文系教養教育を考えるにあたっては、雑多な情報の中から精選し積極的に統合したうえで教育する努力が前提となろう。大学教育の中心はあくまでも専門教育である。専門教育以前に、専門教育との関係が不明確なままに「一般」教育を行えば、無目的な、たるんだ教育になるのは当然であろう。学生のモチベーションを高めたいのであるなら、人文・社会系教養教育は、今後ますます、医学哲学・医療倫理、医学史・医療史、医系文学、さらには医療社会学、医療経済、医事法制などにこだわらねばならないであろう。

国家試験の存在も無視できない。国家試験には、人文系から、医学医療倫理はもちろん、医学医療史、さらには医系文学に関連した問題が出題されている。97回（2003年実施）と98回（2004年実施）の国家試験の復元問題集から引用してみよう。98Ｅ38は哲学（倫理

98 E 38

正しいのはどれか。
a．わが国では安楽死は法律で認められている。
b．わが国では安楽死と尊厳死は同義である。
c．尊厳死は患者の意思にかかわらず、家族の意思によって決めることができる。
d．リビングウィルは終末期医療に対する患者の意思表明文書である。
e．わが国では「尊厳死宣言文書」は法に基づき患者が作成する。

97 E 50

次のうち正しい組合せはどれか。
a．Hippocrates ――――――――――――――――――――――ローマの水道建設
b．Edward Jenner ――――――――――――――――――――――ペストの予防
c．Florence Nightingale ――――――――――――――――――――医師の養成
d．志賀潔 ――――――――――――――――――――――赤痢菌の発見
e．野口英世 ――――――――――――――――――――――マラリア原虫の発見

98 E 50

森鴎外の作品のうち、安楽死を扱ったものはどれか。
a．阿部一族　　b．最後の一句　　c．山椒大夫
d．高瀬舟　　e．舞姫

98 E 49

Hippocrates が記載したとされるもののなかで、現代に至るまで医学界に大きな影響を及ぼしている考え方はどれか。
a．全体的な把握をする。　　b．観察と経験を重視する。
c．自然治癒力を尊重する。　　d．医の倫理の誓いをする。
e．環境と健康の関係を追求する。

学）系、97Ｅ50は史学系、98Ｅ50は文学系、そして98Ｅ49は哲学系とも史学系ともみなせる問題である。これらを少し平易にしたのがＣＢＴのレベルということになろう。

こうして国家試験やＣＢＴに出題される以上、このレベルの教育は人文系担当者として必須ということになる。筆者はこのような試験内容に医学科必修の統合科目「社会医学基礎」または「臨床医学概論」の枠内で触れることにしている。

とはいえ、これらの問に対して正答を導き出すためだけなら、安楽死・尊厳死の哲学的意義を深く理解していなくてもよいし、ヒポクラテスや野口英世の生涯や業績を詳しく知っていなくてもよいし、森鴎外の『高瀬舟』など読んでいなくてもよい。問に答えられるレベルの知識さえあればよいわけである。しかし、教養という点にこだわれば、いずれも、知らないよりは知っているほうがよく、浅く知っているよりは深く理解しているほうがよい。それこそがまさに教養のレベルである。たとえば『高瀬舟』のような作品を読んで思索すること、このレベルが取りも直さず、医学部における人文系教養教育に必要不可欠な中身であろう。端的にいえばＣＢＴや国家試験の周辺部の深い掘り下げである。筆者はこのレベルを、医学科・看護学科合同の選択科目「医系文学」「医療文化史」「医学古典講読」で扱うことにしている。

むろん、筆者は、医学医療と直接には結びつかないリベラルアーツを医学生に教育する意義を否定するものではない。前段落はあくまでも、限られた時間内での教育優先順位を論じたものである。スタッフの総数が少なく、しかも発足当時から「くさび型教育」「6年一貫教育」を謳ってきた医学部に奉職する教員としては、たとえ教養教育担当であっても、教員自身の勝手な趣味を学生に押し付けるような講義は絶対に避けたい。リベラルアーツはむしろ、外部からなるべく大勢の多方面にわたる非常勤講師を招聘して、学生の知的好奇心を刺激するようなかたちで行いたい。しかし、法人化に伴って非常勤講師の予算が大幅に削減された現在、本学のような単科大学では、残念ながらこれは望み薄である。ただし、このままでいくと、大学評価・学位授与機構による教養教育外部評価は今後ますます低得点にならざるを得ないかもしれない。

6．将来展望と提言
―教科書の作成を競い合う時代へ

こうして、医学部の人文系教養教育で優先的になすべきことは明確になった。それも、抽象的・観念的な内容では意味がない。役立つことを意識した具体的・実践的ものでなければならない。つまり明確なストーリー性が要求される。しかも、近年の医学教育が自学自習を建前としている以上、講義はあくまでも問題提起あるいは刺激・きっかけにとどめるべきで、教えすぎないことが肝要であろう。さらに、幅広い教養を個人に求める立場にある人間が、知識を切り売りしていたのでは矛盾もはなはだしい。オムニバス形式の講義は極力避けるべきであろう。

専門教育担当者から認知されるためにも、教養教育担当者は、もはや、お題目を唱えているのではなく具体的で明確なストーリー性をもったテキストの作成を競い合うべき時代に入ったといえよう。テキストといえば、東大教養学部教員による『知の技法』（東大出版会、1994年）、『知の論理』（同、1995年）や立花隆の前掲書『脳を鍛える』があまりにも有名である。しかしこれらはいずれも総花的で、いわば「教養のための教養」のテキストである。時間に追われる医学生が積極的にとるところではない。求められるのは医学生にターゲットを絞った人文系の教科書である。

具体性あるいは明確なストーリー性ということで注目すべきは、文学の意義である。日本の近代文学を例に取れば、あまりにも有名な夏目漱石や島崎藤村については、少なくとも主要作品の名前ぐらいは知っていることが、すべての日本人学生にとって必須の教養といえよう。さらに、教育学部の学生なら、漱石の『坊っちゃん』や藤村の『破戒』の、せめてあらすじくらいは知っていることが必須の教養といってよい。いずれも教師が主人公であるから、学生が理想の教師像あるいは反面教師像をつくっていくうえで大いに参考になるからである。しかし、医学生にとっては、これらを読む意義は比較的薄い。むしろ、漱石が胃潰瘍に悩んでいたこと、それが『明暗』などの作品に反映していることを知って、それらを読むほうが、患者の心理をよみ取る勉強になる。また、藤村なら、梅毒にかかり悲惨な死を遂げた彼の姉をモデルにした『ある女の生涯』を読むほうが性病に対する理解が深まる。「一般」

教育、果ては「普遍」教育などと雲をつかむようなことは考えず、こうして教育学部・医学部など部局ごとに教養教育の内容を具体的に考えるほうが賢明であろう。医学生にはメディカル・ヒューマニティーズを、ということになる。では、その理想的なテキストとはどのようなものなのだろうか。

7．医学生向けの理想の人文系教養教科書 ―その試案

前述のように、学生全般の国語力・読解力・作文力の低下が指摘されている折なので、まずは、名文を基礎に、いわば『声に出して読みたい日本語』や『理想の国語教科書』の医学生向けバージョンを作ることから始めなければなるまい。前述の漱石や藤村をはじめとする著名作家の作品で、しかも基礎的な日本語表現（四字熟語・ことわざ・故事成語など）を豊富に含むものならなおよい。しかも、それ１冊で哲学（倫理）も歴史も学べるものがよい。これが筆者の、いわば「医学生向けの理想の人文系教養教科書」構想である。

そのポイントは次の５点である。

①哲学・史学・文学の３領域をメディカル・ヒューマニティーズの名のもとに有機的に統合する。

②専門科目から遊離しないために、明治初年の近代的医療制度確立以降の日本史を十分に踏まえつつ、現代日本の医療状況を正面から見据えた内容となるよう心がける。

③歴史的な叙述はともすると細かい史実の羅列に終始しがちであり、哲学的な叙述はとかく抽象的・観念的で読者（学生）の興味を減退させがちなので、こうした弊害を避けるために、文学作品を中核にすえて具体的・実践的な問題解決型の内容にする。

④しかも、その文学作品は、医療状況の異なる外国よりは日本のものに注目し、鴎外・漱石・藤村・谷崎・太宰・川端など、すでに定評のある作家の作品の中から、医療現場を舞台とするもの、患者・看護師・医師などを主人公とするもの、病気そのものを主題とするものなどを精選する。

⑤その作品の核心部分を、一気に読める長さの分だけ抜粋し、しかも、難しい言葉には丁寧に脚注をつけ、さらに『声に出して読みたい日本語』に倣って総ルビをつける。

8．『医療人間学のトリニティー』 ―その「はしがき」

筆者が構想する、そのようなテキストとはどんなものか。実のところ、すでに原稿はほぼ完成し、2005年春には刊行される予定である。題して『医療人間学のトリニティー』。刊行のあかつきには、各位から忌憚のない批判・叱正を戴きたい。ここでは、同書に収録される予定の「はしがき」原稿を示すにとどめよう。なお、同書は縦書きなので、数字はすべて漢数字を用いている。

（はしがき）

本書のタイトルに掲げた「医療人間学」は、英語のメディカル・ヒューマニティーズ（medical humanities）の訳語です。メディカルな（つまり医療上の）諸問題を、ヒューマニティーズ（つまり人文科学あるいは人間科学）の手法によって探究する学問といってよいでしょう。

次に「トリニティー」（trinity）ですが、これは、三つで一組になっているものをさす英語です。日本語には、もともと三幅で一組になっている掛け軸をさす「三幅対」という言葉もありますが、かえってわかりにくいので、あえて英語を使いました。トリニティーというと、キリスト教の「三位一体論」、すなわち（父なる）神と（子なる）キリストと精霊とは一体であるという理論が有名です。しかし、本書でいう三位一体のものとは、哲学と史学と文学です。いうまでもなくこれら三分野は、ヒューマニティーズの最も重要な三本柱です。

本書で私は、これら三つの分野を有機的に統合して、私なりの「医療人間学」を構築しようと努めました。一冊にまとめるには分量が多いので、二分冊編成としました。

むろん、医療はこれだけが単独に存在するわけではなく、保健・福祉・教育などの諸分野と密接に関連しあっています。本書の「医療人間学」は、これら関連領域をも視野に入れて、かなり幅広い対象を扱っています。医療・保健・福祉・教育の諸分野が出発点とし到達点ともしているのは、いうまでもなく、「いのち」の尊さを認識することです。本書を私は、「いのち」をキーワードにして、医療とその周辺領域に幅広い関

心をもたれている一般の方々や、これらの学問領域を専攻する学生の方々を念頭において執筆し編集しました。

私が考える「医療人間学」は、決して抽象的・観念的な学問ではなく、日本の医療の現状をふまえた具体的・実践的な学問です。本書は三二の章からなっていますが、全章を通じて私が射程に収めているトリニティー（哲学・史学・文学）を、ここで、より具体的に述べておきましょう。

本書でいう哲学とは、「いのち」にかかわる倫理を探究する倫理学的哲学、すなわち生命倫理（バイオエシックス）です。バイオエシックスは、一九六〇年代のアメリカで、インフォームド・コンセントの確立などを求める医療消費者運動を大きな契機として成立し、自然環境保護・人種差別撤廃・女性解放・反戦平和などの運動と連動しながら学問的に確立されてきました。本書では、医師・患者関係をはじめ、安楽死や尊厳死、脳死と臓器移植、先端生殖医療など、日本における生命倫理の現状と課題に言及しています。

史学の分野では、日本の近代以降の医学・医療史に主眼がおかれています。それを、当時の社会的背景をも含めて叙述するよう努めました。欧米の先進諸国にならって近代的な医療制度が確立され始めた明治時代初期から現代までの医学・医療のあゆみをたどり、そこから教訓を汲み取りつつ未来を展望することは、「医療人間学」の必要不可欠の課題といえるでしょう。

文学については、同じく日本の近代以降の著名作家の作品のなかから、患者・医師・看護師などが登場するもの、病院を舞台とするもの、病気を主題とするものなどを厳選しました。医療人や患者の普遍的な感情の機微を具体的に捉えることができ、読者の琴線にふれる作品ばかりです。難解な語句には脚注をつけました。

つまり本書は、文学作品の一節を素材にして医療の諸相を具体的に把握し（文学）、当該問題にかんする社会的背景を歴史的脈絡の中で捉える（史学）とともに、そこから現代にも通じる哲学・倫理学的事項をくみ取って批判的に吟味し（哲学）、ひいては医療の将来展望を実践的に切り拓くことを意図しています。

過去の文学作品と現代に生きる私たちとの間の距離を自覚しつつ、両者を行ったり来たりしながら思索を重ねることにより、過去から現在へと連なる医療の血脈を探り当てることができます。そうしてこそ、医療の明るい未来も展望できると私は思います。章の枠を超えて有機的に関連しあっている事項も少なくありません。それらに関しては巻末の年表や索引も十分に活用してください。

文　献

(001) 河合栄治郎編『学生と教養』日本評論社、1936年
(002) 唐澤富太郎著『学生の歴史　学生生活の社会史的考察』創文社、1955年
(003) 大室貞一郎著『青春の足跡　学制九十年史』河出新書、1955年
(004) 田中美知太郎著「人文主義の抵抗」(『学習帳から』所収) 新潮社、1962年
(005) 永井道雄著『日本の大学　産業社会にはたす役割』中公新書、1965年
(006) 池田潔著『学生を思う』講談社現代新書、1966年
(007) 深谷昌志著『学歴主義の系譜』黎明書房、1969年
(008) 永井道雄著『近代化と教育』東京大学出版会、1969年
(009) 麻生誠著『大学と人材養成』中公新書、1970年
(010) 宇井純ほか著『大学解体論Ⅰ』亜紀書房、1975年
(011) 加藤諦三著『大学で何を学ぶか　自分を発見するキャンパス・ライフ』光文社、1979年
(012) 天野郁夫著『変革期の大学像　日本の高等教育の未来』日本リクルートセンター、1980年
(013) 新堀通也編著『学者の世界』福村出版、1981年
(014) 潮木守一著『キャンパスの生態誌　大学とは何だろう』中公新書、1986年
(015) 天野郁夫著『大学―試練の時代』東京大学出版会、1988年
(016) 西部邁著『新・学問論』講談社現代新書、1989年
(017) 筒井康隆著『文学部唯野教授』岩波書店、1990年
(018) 鷲田小彌太著『大学教授になる方法』青弓社、1991年
(019) 鷲田小彌太著『大学教授になる方法　実践編』青弓社、1991年
(020) 桜井邦朋著『大学教授　そのあまりに日本的な――』地人書館、1991年
(021) 産経新聞社会部編『大学を問う　荒廃する現場からの報告』新潮社、1992年
(022) 桜井邦朋著『続大学教授　日々是好日』地人書館、1992年
(023) 新堀通也著『私語研究序説　現代教育への警鐘』玉川大学出版部、1992年
(024) 鷲田小彌太編著『大学は変わります』青弓社、1993年
(025) 鷲田小彌太著『自分で考える技術　現代人のための新哲学入門』ＰＨＰ研究所、1993年
(026) 鷲田小彌太著『大学〈自由化〉の時代へ　高度教

育社会の到来』青弓社、1993年
(027) 中川米造著『素顔の医者　曲がり角の医療を考える』講談社現代新書、1993年
(028) 日垣隆著『検証　大学の冒険』岩波書店、1994年
(029) 天野郁夫著『大学―変革の時代』東京大学出版会、1994年
(030) 川成洋編著『だから教授は辞められない　大学教授解体新書』ジャパンタイムズ、1995年
(031) 森田保男ほか著『実践的大学教授法　どうすれば、真の教育ができるのか』ＰＨＰ研究所、1995年
(032) 森靖雄著『大学生の学習テクニック』大月書店、1995年
(033) 川成洋編著『だけど教授は辞めたくない』ジャパンタイムズ、1996年
(034) 苅谷剛彦著『知的複眼思考法』講談社、1996年
(035) 林望著『知性の磨きかた』ＰＨＰ新書、1996年
(036) 天野郁夫著『大学に教育革命を』有信堂、1997年
(037) 阿部謹也著『「教養」とは何か』講談社現代新書、1997年
(038) 鷲田小彌太著『新・学問のすすめ　超・情報化社会の知の活用術』マガジンハウス、1997年
(039) 河合栄次郎著『新版　学生に与う』社会思想社（現代教養文庫）、1997年（原著1940年）
(040) 京都大学高等教育教授システム開発センター編『開かれた大学授業をめざして　京都大学公開実験授業の一年間』玉川大学出版部、1997年
(041) 藤井かよ著『大学“象牙の塔”の虚像と実像』丸善ブックス、1997年
(042) 首都圏大学非常勤講師組合編『大学教師はパートでいいのか　非常勤講師は訴える』こうち書房、1997年
(043) 赤塚行雄著『人文的「教養」とは何か　複雑系時代の人文学』学藝書林、1998年
(044) 安川寿之輔著『大学教育の革新と実践　変革の主体形成』新評論、1998年
(045) 中西新太郎著『情報消費型社会と知の構造　学校・知識・消費社会』旬報社、1998年
(046) 宇沢弘文著『日本の教育を考える』岩波新書、1998年
(047) 高辻正基著『分離シナジーの発想　文科と理科の壁を越えて』丸善ライブラリー、1998年
(048) 鷲田小彌太著『大学で学ぶべきこと、学ばなくてよいこと』ＰＨＰ研究所、1998年
(049) 絓秀実著『大衆教育社会批判序説』秀明出版会、1998年
(050) 中岡慎一郎著『大学崩壊　現職教官が語るその実態と改革案』早稲田出版、1999年
(051) 天野郁夫著『大学―挑戦の時代』東京大学出版会、1999年
(052) 清水真砂子著『学生が輝くとき　何か、こわい、この時代に』岩波書店、1999年
(053) 阿部謹也著『大学論』日本エディタースクール出版部、1999年
(054) 市川伸一ほか著『学力危機　受験と教育をめぐる徹底討論』河出書房新社、1999年
(055) 伊藤秀子ほか編『ガイドブック　大学授業の改善』有斐閣、1999年
(056) 岩崎稔ほか編『激震！　国立大学　独立行政法人化のゆくえ』未來社、1999年
(057) 寺崎昌男著『大学教育の創造　歴史・システム・カリキュラム』東信堂、1999年
(058) 安岡高志ほか著『授業を変えれば大学は変わる』プレジデント社、1999年
(059) 和田秀樹著『学力崩壊　「ゆとり教育」が子どもをダメにする』ＰＨＰ研究所、1999年
(060) 森毅著『東大が倒産する日』旺文社、1999年
(061) 大崎仁著『大学改革　1945～1999』有斐閣、1999年
(062) 宇佐美寛著『大学の授業』東信堂、1999年
(063) 浅野攝郎ほか編『東京大学は変わる　教養教育のチャレンジ』東京大学出版会、2000年
(064) 大学非常勤講師問題会議編『大学危機と非常勤講師運動』こうち書房、2000年
(065) 中村忠一著『大学倒産　定員割れ、飛び級、独立行政法人化』東洋経済新報社、2000年
(066) 山口昌男著『独断的大学論　面白くなければ大学ではない！』ジーオー企画出版、2000年
(067) 梶田叡一著『新しい大学教育を創る』有斐閣、2000年
(068) 川成洋著『大学崩壊！』宝島社新書、2000年
(069) 岩波書店編集部編『大学活用法』岩波ジュニア新書、2000年
(070) 和田秀樹著『大人のための勉強法』ＰＨＰ新書、2000年
(071) 森信茂樹著『大学教授物語　ニューアカデミズムの創造を』時評社、2000年
(072) 浅羽通明著『教養論ノート』幻冬社、2000年
(073) 天野郁夫著『教育の21世紀へ』有信堂、2000年
(074) 岩田年浩著『教授が変われば大学は変わる』毎日新聞社、2000年
(075) 筒井清忠著『新しい教養を求めて』中公叢書、2000年
(076) 鵜川昇ほか著『大学の崩壊　対談　この危機を救う道はあるか！』ＩＮ通信社、2000年
(077) 浅羽通明著『大学講義　野望としての教養』時事通信社、2000年
(078) 丹羽健夫著『悪問だらけの大学入試　河合塾から見えること』集英社新書、2000年
(079) 鷲田小彌太著『「知」の勉強術　大学時代に何を学ぶか』ＫＫベストセラーズ、2000年
(080) 大野晋ほか著『学力があぶない』岩波新書、2001年

(081) 鷲田小彌太著『新　大学教授になる方法』ダイヤモンド社、2001年
(082) 全カリの記録編集委員会著『立教大学〈全カリ〉のすべて　リベラル・アーツの再構築』東信堂、2001年
(083) 和田秀樹著『大人のための勉強法　パワーアップ編』ＰＨＰ新書、2001年
(084) 中山治著『「勝ち抜く大人」の勉強法』洋泉社、2001年
(085) 戸瀬信之ほか著『大学生の学力を診断する』岩波新書、2001年
(086) 大学の研究教育を考える会編『大学の社会的責任　大学における学問・教育・人材育成』丸善、2001年
(087) 天野郁夫著『大学改革のゆくえ　模倣から創造へ』玉川大学出版部、2001年
(088) 島田博司著『大学授業の生態誌　「要領よく」生きようとする学生』玉川大学出版部、2001年
(089) 阿部謹也著『学問と「世間」』岩波新書、2001年
(090) 保阪正康著『医学部残酷物語　もう医者にはなりたくない』中公新書ラクレ、2001年
(091) 大島保彦ほか著『駿台式！　本当の勉強力』講談社現代新書、2001年
(092) 竹内久顕著『予備校教師からの提言　授業・入試改革へ向けて』高文研、2001年
(093) 加地伸行著『〈教養〉は死んだか　日本人の古典・道徳・宗教』ＰＨＰ新書、2001年
(094) 竹内洋ほか編『論争・東大崩壊』中公新書ラクレ、2001年
(095) 立花隆著『東大生はバカになったか　知的亡国論＋現代教養論』文藝春秋、2001年
(096) 古沢由紀子著『大学サバイバル　再生への選択』集英社新書、2001年
(097) 蓮實重彦著『私が大学について知っている二、三の事柄』東京大学出版会、2001年
(098) 石弘光著『大学はどこへ行く』講談社現代新書、2002年
(099) 東郷雄二著『独学の技術』ちくま新書、2002年
(100) 喜多村和之著『大学は生まれ変われるか　国際化する大学評価のなかで』中公新書、2002年
(101) 浅野誠著『授業のワザ一挙公開　大学生き残りを突破する授業づくり』大月書店、2002年
(102) 中井浩一『「勝ち組」大学ランキング　どうなる東大一人勝ち』中公新書ラクレ、2002年
(103) 上野千鶴子著『サヨナラ、学校化社会』太郎次郎社、2002年
(104) 島田博司著『私語への教育指導　大学授業の生態誌２』玉川大学出版部、2002年
(105) 齋藤孝著『読書力』岩波新書、2002年
(106) 新渡戸稲造著『修養』たちばな出版、2002年（原著1911年）
(107) 永井道雄著・山岸駿介編『未完の大学改革』、中公叢書、2002年
(108) 黒川清ほか著『医学生のお勉強　「クレイジー」な国ニッポンを理解しよう』芳賀書店、2002年
(109) 竹田篤司著『明治人の教養』文春新書、2002年
(110) 絹川正吉編著『ＩＣＵ〈リベラル・アーツ〉のすべて』東信堂、2002年
(111) 寺崎昌男著『大学教育の可能性　教養教育・評価・実践』東信堂、2002年
(112) 桜井邦朋著『続々大学教授　予期せぬできごと』地人書館、2002年
(113) 日経産業新聞編『大学　知の工場　ここから競争力が生まれる』日本経済新聞社、2002年
(114) 竹内洋著『教養主義の没落　変わりゆくエリート学生文化』中公新書、2003年
(115) 秦郁彦著『旧制高校物語』文春新書、2003年
(116) 朝日新聞教育取材班著『大学激動　転機の高等教育』朝日文庫、2003年
(117) 中山茂著『大学生になるきみへ　知的空間入門』岩波ジュニア新書　2003年
(118) 鷲田小彌太著『学者の値打ち』ちくま新書、2004年
(119) 丹羽健夫著『予備校が教育を救う』文春新書、2004年

旭川医科大学研究フォーラム 5(1) ：2 ～14，2004

Enriching Education in the Humanities for Medical Students: A Proposed Textbook

KONDO Hitoshi*

Summary

For college and university students, the most important cultural fields in the humanities are philosophy, history and literature. For medical students, they should be medical philosophy (or bioethics), medical history and medicine in literature. These three subjects should be integrated under the name of Medical Humanities. The present writer describes an ideal textbook for this field.

Key words culture, humanities, philosophy, history, literature

*Department of History and Philosophy, Asahikawa Medical College